

令和7年度 調査研究

子供に内在する非認知能力の発揮及び伸長を促す架け橋期の教育  
2年次

～「ぐんま架け橋プログラム」の開発・実践・普及過程を通して考える～

## 報告書

始めよう!

「ぐんま架け橋プログラム」

群馬県総合教育センター幼児教育センター

# 「ぐんま架け橋プログラム」の構成

1. 理念
2. 幼児教育施設で作成する指導計画と「修了時の姿」
3. 小学校における「発達に基づいた環境の構成モデル」の活用
4. 非認知能力の発揮・伸長を促す授業の構想
5. 作成したカリキュラムを共有する方法
6. 幼保こ小のグループ分けとカリキュラムの見直しに向けた行政側の取組

# 1. 理念

幼児期における遊びを通した総合的な学びは、感性を働かせてよさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたり、気付いたことやできるようになったことなどを使いながら試したり、いろいろな方法を工夫したりすることなど、思いや願いをきっかけとして発展していく。

中央教育審議会(2023) 『架け橋プログラム実施の手引き(初版)』 p.22

大人の指示によって活動に取り組んだり、報酬の獲得や失敗の回避を目的とするような外発的動機付けによって活動に取り組んだりするのではなく、幼児の好奇心や興味・関心といった内発的動機付けに基づいて幼児自ら環境に関わることが必要不可欠である。

保育者は、幼児が自ら主体的に環境と関わり、自分の世界を広げていく過程そのものを発達と捉え、幼児一人一人の発達の特性と発達の課題を把握し、幼児の発達にとって必要な経験が得られるような状況をつくることを大切にしなければならない。

参考資料：文部科学省(2018) 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館

発達にとって必要な経験を得るためには、結果として何ができたか、何を達成したかではなく、遊ぶ中で子供たちが没頭し、充実感や満足感を味わうことが重要である。

遊ぶ過程の中で、幼児は自らに内在する非認知能力を発揮し、伸長していく。

非認知能力は発揮されることによって伸長していく

子供の発達と学びの連続性を確保するためには、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、幼稚園と小学校の教師が共に幼児の成長を共有することを通して、幼児期から児童期への発達の流れを理解することが大切である。

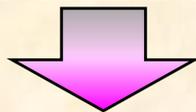
文部科学省(2018) 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館 P.86

## 教科固有の知識や技能をつなぐ

「いも掘りをするときに、収穫したいもの数を数えるのだから、いも掘りは算数である」

「お店屋さんごっこをするときに、看板やメニューを作るために文字を書くのだから、お店屋さんごっこは国語である」

といった、教科固有の知識や技能の接続を意図すると、幼児期における「遊びを通した総合的な学び」で育まれている力を見過ごしてしまう可能性がある。



## 子供たちが発揮・伸長してきた「非認知能力」をつなぐ

例えば、いも掘りの中では、一つのいもからたくさんがいもができることへの不思議さや生命への好奇心、土の中の様子を豊かに思い描く想像力、自分一人では掘り出せないいもを友達と協力して掘り出そうとする協同性などが発揮され、伸長していると捉える。

幼児期に**発揮**されてきたこれらの非認知能力を小学校においても**発揮**していくことが、生涯にわたる学びの基盤となる。

(表1) 架け橋期に発揮される非認知能力

自己に関わる心	感受性	諸感覚を通して環境から刺激を受け、驚きや感動を見いだす。
	好奇心	ものごとにおもしろさを見だし、興味をもつ。
	探求心・挑戦意欲	自らやりたいことを見だし、積極的に環境に関わろうとする。
	自立心・主体性	やりたいことを自分で決めて、自分の力で取り組もうとする。
	自制心	自分の気持ちや感情と向き合おうとする。
	自信・自尊心	「自分ならできる」という自信をもってものごとに取り組もうとする。
	楽観性	目的の達成に向けて、前向きで楽観的な期待をもつ。
	目標への情熱・粘り強さ	情熱をもち、うまくいかないことがあっても諦めずにやり続けようとする。
	想像性	心の中のイメージを言葉や動き等で表現したり、形にしたりしようとする。
社会性に関わる心	心の理解能力	相手の気持ちや状況を理解しようとする。
	共感性・思いやり	困っている友達や泣いている友達の気持ちに寄り添い、助けようとする。
	道徳性・規範意識	よいことと、悪いことを自分なりに判断し、正しいと思う行動をとろうとする。
	コミュニケーション力	言葉や動き等を通して、相手に思いを伝えたり相手の思いを理解しようとしたりする。
	協調性・協同性	共通の目的の実現に向けて、友達と一緒に考えたり、工夫したり、協力したりしようとする。

内発的動機付け

アタッチメント・風土づくり

木村弘子(2025) 「小学校第1学年における非認知能力の発揮及び伸長を促す架け橋期のカリキュラムの提案-子供の発達に基づいた環境の構成や教師の構えを視点として-」 『令和6年度長期研修員研究報告書』 群馬県総合教育センター

令和6年度総合教育センター幼児教育センターの研究において、架け橋期に発揮される非認知能力を整理した(表1)。様々な先行研究に基づき、非認知能力を心の働きであると捉え、「自己に関わる心」と「社会性に関わる心」に分類するとともに、架け橋期の子供たちの発達に合った非認知能力を抽出した。

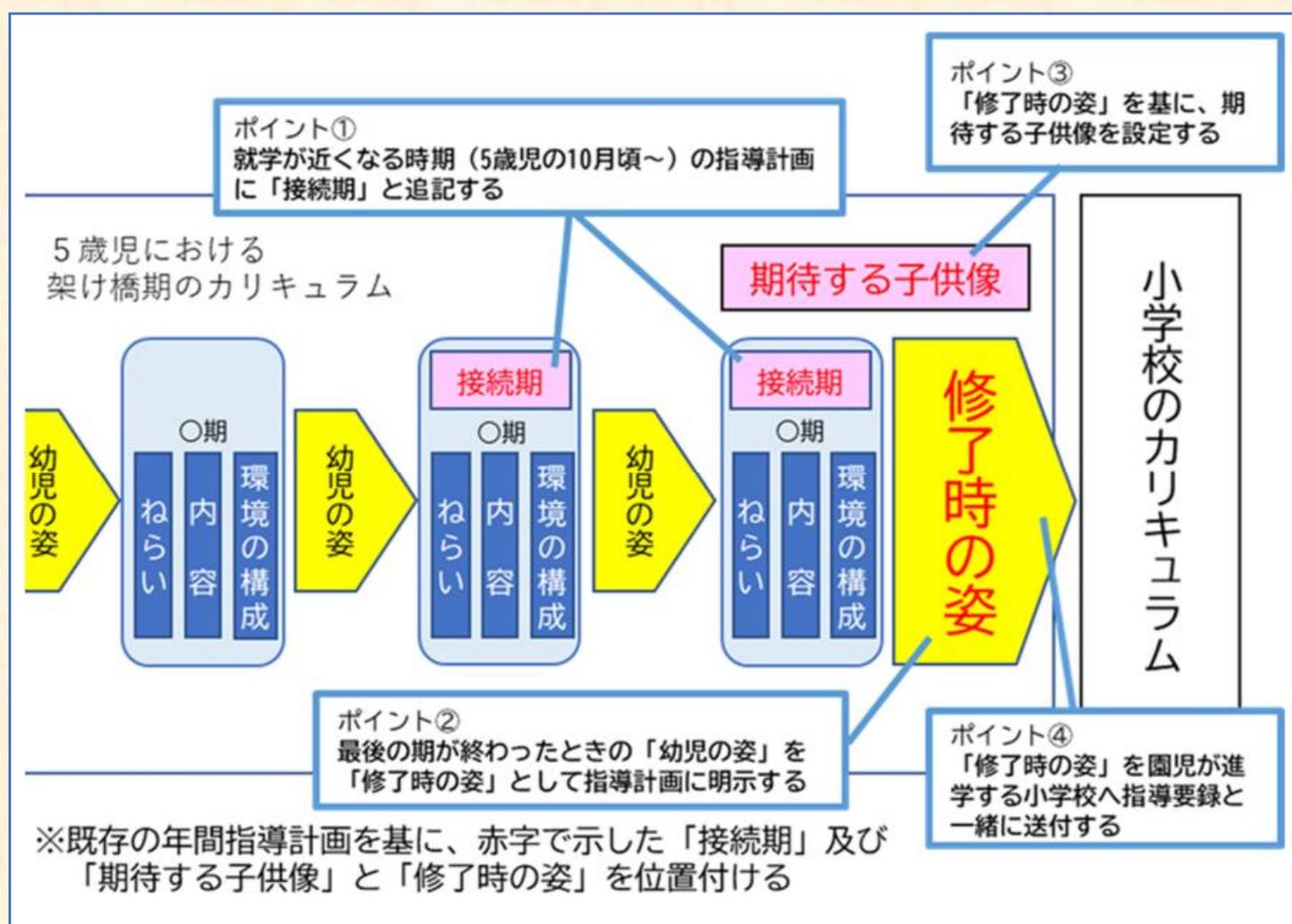
これらの非認知能力を子供たちが発揮するためには、アタッチメントや安心できる集団の風土が必要である。そのため表の下段には「アタッチメント・風土づくり」を全ての非認知能力を下支えするものとして位置付けた。さらに、これらの非認知能力は子供たちの内発的動機付けに基づいた活動の中で発揮されると考え、表の右側に全ての非認知能力に関わる要素として「内発的動機付け」を位置付けた。

教師とのアタッチメントや集団の風土づくり、遊びや学びへの内発的動機付けが、非認知能力の発揮を促す

## 2. 幼児教育施設で作成する指導計画と「修了時の姿」

子供たちが発揮・伸長してきた「非認知能力」をつなぐためには、幼児教育施設の教育・保育を通して、子供たちがどのような場面において、どのような非認知能力を発揮し・伸長してきたのかを、幼児教育施設から小学校に伝える必要がある。

そこで活用したいのが、群馬県総合教育センター幼児教育センターが令和2年度に示した「修了時の姿」を用いた幼保こ小の連携・接続の方法である。ここでは、最後の期が終わったときの幼児の姿を「修了時の姿」として指導計画に明示し、それを指導要録と一緒に進学する小学校へ送付することが有効であると示されている。



(図1) 修了時の姿を活用した幼保こ小連携・接続の方法

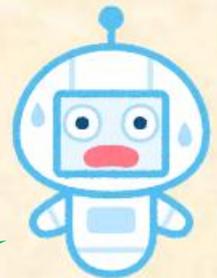
これまでの小学校への適応を目指す連携・接続では、施設ごとの違いや特色があることが、小学校における管理的な指導につながっていた場合もある。

幼

進学先の小学校ごとにやり方が違うから、どこに合わせたらいいか分からない・・・



違いや特色が円滑な接続を阻害？



小

園ごとに特色があって、子供たちの実態が多様すぎるから入学時に統一したい・・・

教育活動や指導方針が各学校園で異なるのは当然であるが、幼児教育施設における「修了時の姿」を、子供たちが発揮・伸長してきた「非認知能力」に着目して分析すると、多くの共通点が見られた（次ページ図2）。さらに、先述の（表1）に示されている非認知能力は、各園の「修了時の姿」の中に網羅されていた。

これらのことから、子供たちが発揮・伸長してきた「非認知能力」に着目することで、施設ごとの違いや特色を生かし、円滑な連携・接続につなげることができると考えた。

教育活動や指導方針は異なっても  
育みたい子供の姿は共通している  
これが違いを乗り越えるための突破口となる

## A園「修了時の姿」(抜粋)

- ◆ドッジボールやサッカーなどは、**ルールを自分たちで考えたり、場を工夫したりして進めていく。**友達同士で始めた遊びだからこそ、途中で抜けない、ずるいことには異議を言うなどの姿も見られるようになる。多くの幼児が、ボール扱いを**小さい子に教える**優しい面も発揮するようになる。
- ◆こま回しやなわとびをするときに、**自分なりのめあて**をもって取り組むようになる。**できるまで頑張ろう**としたり、**友達の姿に刺激を受けて挑戦しよう**としたりする。友達同士で**励まし合ったり、喜び合ったり、コツを伝え合ったりする**ようになる。
- ◆当番活動については、**友達同士で声を掛け合って責任感をもって取り組む**ようになる。下学年の台拭きやエプロンの回収にも、意欲的に取り組む。
- ◆小学校への期待感とともに、登下校の信号の判断や環境の変化に対する不安感を抱く幼児も見られるが、**友達や周りの人に支えられて自信をもって行動する**ようになる。

## B園「修了時の姿」(抜粋)

- ◆自分なりの目的や課題に取り組み、**考えたり、工夫したり、挑戦したりする気持ちをもって、できるまで頑張ったり、思いが実現するように友達と工夫したり教え合ったりする**ようになる。
- ◆今まで遊んでいた友達以外の幼児との交流が増し、**一緒に遊ぶ中で、自分の気持ちや考えをはっきりと伝えようとする**ようになる。
- ◆友達の考えや動きを受け入れ、**友達のよさを認め、相談しながら試行錯誤して遊ぶ**幼児が増えてくる。
- ◆生活する中で、**今どうしたらよいのかを、友達の動きを見たり、友達や先生に聞いたり、自分で考えたりしながら、主体的に行動する**幼児が多くなってくる。
- ◆修了の喜びと寂しさ、小学校入学への期待と不安など多様な感情に揺れながらも、**周りの人に支えられながら、自信をもって行動する**ようになる。

探求心・挑戦意欲

自立心・主体性

協調性・協同性

共通して発揮されている非認知能力

(図2) 「非認知能力」に着目した「修了時の姿」の共通点

### 3. 小学校における「発達に基づいた環境の構成モデル」の活用

各幼児教育施設の教育活動を通して幼児が発揮している非認知能力が共通しているということは、その視点で考えれば小学校側のカリキュラムも無理なく作成できる可能性がある。

昨年度作成した「発達に基づいた環境の構成モデル」は、子供の発達の様相によって1年間を5期に分け、それぞれの期で非認知能力を発揮している子供の姿を、小学校における観察を基に記述した。そして、そのような姿を安心して発揮できるような**環境の構成**の在り方や教師の関わり方（**方法としての教師**）を示した。また、各期の具体的な子供の姿を示した資料として、事例集「きらり」を発表した。

今年度、「発達に基づいた環境の構成モデル」を活用した小学校からは、以下のような感想が寄せられた。

#### 「発達に基づいた環境の構成モデル」を活用した小学校の感想

- **発達の様相**が的確に捉えられている。
- **時期に適した指導**がイメージしやすい。
- **発達の姿や環境の構成**が具体的。
- **担任としての心構え**を系統立てて確認することができる。
- **今まで経験則として行っていたこと**が具体的に示されている。
- **発達に応じた支援**をより意識的に行うことができる。

「発達に基づいた環境の構成モデル」を活用することで  
児童の発達に応じた関わりが可能となる。

→非認知能力の発揮につながる

# 「発達に基づいた環境の構成モデル」の内容

## ② 発達の様相

## ① 期待する子供像

## ③ 期のねらい

## ④ 予想される児童の姿

期	Ⅰ 4月上旬～5月中旬	Ⅱ 5月下旬～夏休み	Ⅲ 夏休み明け～10月中旬	Ⅳ 10月下旬～冬休み	Ⅴ 冬休み明け～春休み
発達の様相	・学校生活への期待や新たな環境への不安を感じる。 ・担任の教師への親しみをもち、新たな友達との人間関係が形成される。	・学校生活への不安や緊張から、体調不良を訴えたり、教師に触れたりしようとする。	・同じ園出身者での関わりを基に、クラスの友達に興味をもち交流するようになる。	・休み時間や行事の際に異学年と交流し、安心感や憧れの気持ちをもつ。	・教師の仕事に関心をもち積極的に手伝おうとする。
ねらい	・新しい学校への所属感や安心感をもつ。 ・学校生活の流れを知り、過ごしながら生活しようとする。 ・学校の友達と良好な関係を築こうとする。 ・関わったこと、ほめたこと、思っていること等を言葉で表現する。	・学校生活への緊張や不安から、体調不良を訴えたり、教師に触れたりしようとする。	・同じ園出身者での関わりを基に、クラスの友達に興味をもち交流するようになる。	・休み時間や行事の際に異学年と交流し、安心感や憧れの気持ちをもつ。	・教師の仕事に関心をもち積極的に手伝おうとする。
予想される児童の姿	・学校生活への不安や緊張から、体調不良を訴えたり、教師に触れたりしようとする。 ・同じ園出身者での関わりを基に、クラスの友達に興味をもち交流するようになる。	・学校生活への緊張や不安から、体調不良を訴えたり、教師に触れたりしようとする。	・同じ園出身者での関わりを基に、クラスの友達に興味をもち交流するようになる。	・休み時間や行事の際に異学年と交流し、安心感や憧れの気持ちをもつ。	・教師の仕事に関心をもち積極的に手伝おうとする。
環境の構成	・授業時間を柔軟に設定する。 ・友達と関わりやすい環境づくりや、友達との関わりを意図的に促す。 ・教師と一緒に学級の仕事をする場面を設定する。 ・児童の思いを受け止め、安心して伝えられるようにする。	・学校生活をより良くするために行動している児童の姿に注目し、期りを等々進みながら教室環境について一緒に考える。 ・児童が生活の中から見つけた気付きや発見を大切にし様々な教科を関連付けながら学べるよう支援する。	・新学期への児童の期待や不安を受け止め、教師自身の休み中の話を紹介したり、児童の話を聞いたりする。 ・課題に対して、正解や、やりやすい方法を一方的に与えるのではなく、一緒に取り組む考えようとする。	・児童の期待や不安を受け止め、喜びや驚き、意欲に対する不安を受け止め、これまでの児童の成長を認め、自信を育てる。	・児童の期待や不安を受け止め、喜びや驚き、意欲に対する不安を受け止め、これまでの児童の成長を認め、自信を育てる。
方法としての教師	・教師の仕事を手伝おうという思いを受け止め、感謝の気持ちを抱えたり、協力して取り組むことを喜ばせたりする。 ・児童の期待や不安に寄り添うと共に、緊張や不安から来る行動を受け止めるようにする。 ・考えを伝えたいという思いを受け止めると共に、他の児童の存在を意図できるようにする。	・学校生活をより良くするために行動している児童の姿に注目し、期りを等々進みながら教室環境について一緒に考える。 ・児童が生活の中から見つけた気付きや発見を大切にし様々な教科を関連付けながら学べるよう支援する。	・新学期への児童の期待や不安を受け止め、教師自身の休み中の話を紹介したり、児童の話を聞いたりする。 ・課題に対して、正解や、やりやすい方法を一方的に与えるのではなく、一緒に取り組む考えようとする。	・児童の期待や不安を受け止め、喜びや驚き、意欲に対する不安を受け止め、これまでの児童の成長を認め、自信を育てる。	・児童の期待や不安を受け止め、喜びや驚き、意欲に対する不安を受け止め、これまでの児童の成長を認め、自信を育てる。
主な行事や学習内容	・入学式 ・1年生歓迎会 ・1年生説明会 ・どうぶつ園 ・お楽しみ会 ・運動会 ・お楽しみ会 ・お楽しみ会	・入学式 ・1年生歓迎会 ・1年生説明会 ・どうぶつ園 ・お楽しみ会 ・運動会 ・お楽しみ会 ・お楽しみ会	・入学式 ・1年生歓迎会 ・1年生説明会 ・どうぶつ園 ・お楽しみ会 ・運動会 ・お楽しみ会 ・お楽しみ会	・入学式 ・1年生歓迎会 ・1年生説明会 ・どうぶつ園 ・お楽しみ会 ・運動会 ・お楽しみ会 ・お楽しみ会	・入学式 ・1年生歓迎会 ・1年生説明会 ・どうぶつ園 ・お楽しみ会 ・運動会 ・お楽しみ会 ・お楽しみ会

・学校生活への緊張や不安から、体調不良を訴えたり、教師に触れたりしようとする。 **I期①**

・同じ園出身者での関わりを基に、クラスの友達に興味をもち交流するようになる。 **I期②**

・休み時間や行事の際に異学年と交流し、安心感や憧れの気持ちをもつ。 **I期③**

・教師の仕事に関心をもち積極的に手伝おうとする。

・学校の生活の流れやルールに沿って生活しようとするが、切り替えがうまくできないこともある。

## ⑤ 環境の構成

## ⑥ 方法としての教師

## ⑦ 主な行事や学習内容

### 自分の席に座れないときどうする？

小学校での生活科の授業です。様々なことがあって授業中の席に座ることができないA児がいます。A児は自分の気持ちを落ち着かせるために、担任の腕にくっつきます。

不安なときは、先生に抱えられて落ち着くことができました。

発揮された非認知能力

- 自制心 (A児)
- 心の理解能力 (周りの児童)

方法としての教師

- 子供が精神的に安定するためのよりどころ

子供の思いや意図

- 席に座れないA児
- 気持ちが落ち着かない、どうしよう。
- 教室でみんなと同じように授業を受けたい。
- 先生に触れて安心したい。(周りの児童)
- A児は、今気持ちが落ち着かないのかもかもしれない。
- 先生とアサガオの話をもちたいたいな。

教師の関わり方

- 「席に座りなさい」としつこく注意しない。
- 座席に座っている児童をわざと抱えて、授業を進めている。
- 全体を楽しく雰囲気しようとしている。
- 全席でA児を受け止めている。

安心感を得て、この児童は情緒をコントロールしました。教師の近くにいること、席に座れることで安心感を得たのでしょう。しばらくしてA児は自分の席に戻ります。教師は「どうしたの？」と変わらずに、身体を適して受け入れました。だからこの児童は自分で「どうにかする」ことができたのでしょう。

事例集「きらり」の記述

## 「環境の構成」とは

「環境の構成」とは、単に教材を配置すればよいというものではない。

「人・もの・こと」としては教師や友達と関われる物的・空間的環境や、十分な時間、雰囲気などを環境として捉える。また、「教師の意図」としては環境にねらいや内容を含ませ、子供が環境に主体的に関われるよう、興味・関心を引き起こすようにすること、また、環境に関わって遊ぶ中で、成長に必要な経験が得られることが重要である。

このような環境の構成によって、子供の感受性や好奇心・探求心を刺激し、興味や関心を広げ、問題を見いだしたり解決したりできる状況を作り出すことができる。

教師の意図

人・もの・こと

ねらいや内容を  
含ませる

教師や友達との  
関わり

状況をつくりだす  
営み

子供の興味・関心を  
引き起こす

物的・空間的環境

成長に必要な  
経験が得られる

十分な時間や  
楽しめる雰囲気

豊かな感受性

問題を見いだしたり  
解決したりする

好奇心や探求心

興味や関心の広がり

(図3) 環境の構成

## 「方法としての教師」とは

環境の構成においては、教師も環境の一部であるという認識が重要である。中村(2015)は、これを「方法としての教師」という言葉で表現している。

子供がしていることが、その子にとってどのような意味があるのかを理解し、同じ目線に立って共感、共鳴すること、子供一人一人の状況に即して、必要な人に、必要なときに、必要な援助を行うこと、時には教師自ら環境に関わることで、学ぶ姿や関わる姿のモデルとなること、そして、このような関わりをすることによって子供が精神的に安定するためのよりどころとなることが教師には求められる。

「方法としての教師」を意識して子供たちと関わることで、子供たちが非認知能力を安心して発揮できる状況を作り出すことができると考えた。

### 子供の活動の意味を 理解する

学ぶ姿や関わる  
姿のモデルとなる

子供の目線に  
立つ

方法としての  
教師

子供が精神的に  
安定するための  
よりどころ

思いに共感し  
共鳴する

必要な人に対して  
必要なときに  
必要な援助を行う

(図4) 方法としての教師

## 4. 非認知能力の発揮・伸長を促す授業の構想

子供たちが幼児期の教育を通して発揮してきた非認知能力は、各教科における主体的・対話的で深い学びを実現する上で不可欠な要素となる。

しかし、子供たちがどんなに非認知能力を内在していても、それを発揮できる状況が無ければ、非認知能力が発揮されることは困難である。

そこで、児童の実態を基に、学習や生活の中で発揮されている（されつつある）非認知能力や、発揮させたい非認知能力を見いだし、そこから児童の発達に必要な経験を考え、そのような経験を自ら得られるような授業を構想していくことが重要である。

その際、新たな単元を一から作り上げることは大きな労力を要するため、幼児教育センターでは既存の各教科の指導計画の中から、児童の発達に必要な経験が得られる単元・題材を見付け、環境の構成を工夫することで、子供たちが非認知能力を発揮しながら学ぶ授業を構想し（図5）、研究協力校で実践した。実践の詳細については令和7年度長期研修員の報告書に記載する。

児童の実態を捉える

↳ 発揮されている（されつつある）非認知能力  
発揮させたい非認知能力を見い出す

↳ 児童の発達に必要な経験を考える

↳ 児童自ら必要な経験を得られる教科・単元を選定し、環境の構成を工夫する

↳ 授業実践を行い、子供の姿を基に授業を評価する

（図5）授業構想の手順



## 6. 幼保こ小のグループ分けとカリキュラムの見直しに向けた行政側の取組

ここまで述べてきたように、架け橋プログラムは**各幼児教育施設や小学校の教育活動の統一を目指すものではない。**

様々な幼児教育施設の教育活動を通して育まれた資質・能力、つまり非認知能力を伝え合うことで、**互いの教育の目的を理解し合う**ことが重要である。その中で、幼保こ小の教職員が「環境の構成」という視点から互いの教育に対する理解を深め、**新たな教育実践を共に創り出していく**ことが求められている。そこで、まずは小学校区など、近い施設同士でグループを作り、連携・接続を図ることが効果的である。ただし、グループを越えて連携・接続することを妨げるものではないことに留意する必要がある。むしろ積極的に越境していくことで、知見を広げることが可能になる。

このためには、**行政の努力**が不可欠な要素となる。なぜなら、県内の幼児教育施設の大半は保育所や私立の園など、教育委員会の管轄外の施設だからである。各教育委員会のリーダーシップの元、まずは会議や研究会のノウハウを持っている公立の小学校を中心として、公立幼稚園等、公立保育所、私立幼稚園等へと連携を広げていくことが現実的な解決となることが全国的な実践からも明らかになっている。

- 各幼児教育施設や小学校の**教育活動の統一を目指すものではない。**
- 幼児期の教育で発揮されていた**非認知能力**を理解する。
- 幼児教育と小学校教育の教育方法を「**環境の構成**」の視点から見直し、**新たな教育実践を創り出す。**
- まずは近い園と小学校(小学校区)での交流から始めたい。  
→そのためには、**行政も壁を越える**ことが必要。

## 【引用・参考文献】

- ・ 大島崇, 中村崇, 太田紀子(2025) 「子供に内在する非認知能力の発揮及び伸長を促す架け橋期の教育—発達に基づいた架け橋期のカリキュラムの構想—」 群馬県総合教育センター
- ・ 中央教育審議会(2023) 『架け橋プログラム実施の手引き(初版)』
- ・ 文部科学省(2018) 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館
- ・ 木村弘子(2025) 「小学校第1学年における非認知能力の発揮及び伸長を促す架け橋期のカリキュラムの提案—子供の発達に基づいた環境の構成や教師の構えを視点として—」 『令和6年度長期研修員研究報告書』 群馬県総合教育センター
- ・ 幼児教育センター(2025) 「非認知能力の視点から読み解く幼児教育と小学校教育をつなげるヒント集 架け橋事例集『きらり』」 群馬県総合教育センター
- ・ 森上史朗, 柏女霊峰(編)(2010) 『保育用語辞典, 第6版』 ミネルヴァ書房
- ・ 中村崇(2015) 「幼稚園児の運動発達を促す遊びと教師の役割」 『群馬大学大学院平成26年度修士論文』

2026年3月  
発行 群馬県総合教育センター  
幼児教育センター  
〒372-0031  
伊勢崎市今泉町1-233-2  
電話 (0270) 26-9203  
(幼児教育センター 直通)